



# ミュージアム・レター

Gakushuin University  
Museum of History

# Museum Letter No.16

発行日 ● 平成23年(2011)7月8日

もくじ

ごあいさつ……………1

第64回 学習院大学史料館講座  
「日本美術史 三粹人饒舌  
—水墨画・琳派・浮世絵の魅力—」抄録……………2-3

Information……………4

- ・「宮廷の雅 —有栖川宮家から高松宮家へ—」展のご案内
- ・「学習院大生による『白樺』同人」展

## ごあいさつ

史料館では年3回、学内外の専門家による公開講座を開いております。おかげさまでこの史料館講座は好評のうちに回数を重ね、6月4日(土)で第64回を迎えました。「日本美術史 三粹人饒舌」と題したこの回は、3人の講師を招いて三つの講演と鼎談の二部構成にするという、かつてない豪華な催しとなりました。講師の河合正朝・河野元昭・小林忠の三氏(講演順)はイニシャルから「美術史界の3K」として知られ、いずれも日本美術史研究の代表的存在です。これらの大御所をお迎えして日本美術の魅力を饒舌に語っていただくという企画でしたが、一方で、お話がエンドレスになったらどうしよう、という懸念もありました。しかし、講師の方々が見事に時間を守ってくださり(K氏のお一人は持参のタイマーをセットして話し始められました)、聴き足りない(おそらく講師の方々には話し足りない)思いが残ったものの、たいへんに中身の濃い時間を持つことができました。

印象深かったことはいろいろあるのですが、ここには二つだけ記すことにしましょう。一つは、鼎談で指摘された「対象が描くに値するかどうか」という考え方の問題です。中国では、山水は重要な画題でしたが、花鳥は描くに値しないとみなされていたそうです。しかし、日本では花鳥を描くに値する画題とみなし、それによって日本の水墨画は中国の模倣を脱して独自の完成を実現できたということでした。西洋では、伝統的に人物画が中心で、風景画の意義が認められたのはようやく19世紀のことです。それに対して東洋では古くから風景画が重視されたと授業で話すこともあるのですが、山水画と花鳥画の区別については意識していませんでした。自らの不明を恥じると共に、文化圏ごとの描くに値する、値しないという「偏見」について研究するのも面白いかもしれないと思いました。

もう一つ特筆すべきは、鼎談における三氏のやりとりが非常によくかみ合って日本美術の特質の新たな認識に私たちを導いたということです。学生時代以来の研究仲間の息の合ったやりとりであるとともに、真の専門家は同時に専門領域を超えた全体像を眺めることができ、それゆえに相互理解が滑らかに行われる、ということを実感しました。加えて、小林氏の司会の巧みさも鼎談の成功に貢献したと思われまふ。示唆に富み、かつ楽しいお話を聞かせてくださった3Kの粹人の方々に、改めて御礼申し上げます。

(館長 高橋裕子)

